



Title	Cultural Formation Studies (1) はじめに
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72727
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

はじめに

1. *Cultural Formation Studies I* の刊行に際して

この報告書は、大阪大学大学院言語文化研究科が主催する「言語文化共同研究プロジェクト」のひとつとして2018年度に進めた共同研究 *Cultural Formation Studies (CFS)* の報告書である。CFS は、大阪大学大学院言語文化研究科教員、同文学研究科教員、バングルディシュのイスラム大学人文社会科学学部教員、言語文化研究科の大学院生などを「正規」メンバーとする研究会だが、そこには言語文化研究科を修了して大学の教職についているものなど、「非正規」のメンバーも数多く参加している。そして、東京、名古屋、金沢、岐阜などから集まってくるこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成り立たない。これらの OG / OB が現役の院生たちに与えるアドバイスや刺激も、たいへん有意義なことと感じている。

研究会のこのようなメンバー構成には過去の経緯がある。というのも、この研究会は、20年以上前にはじめた研究会の「後継」の「後継」にあたるからだ。1996年度に開始したカルチュラル・スタディーズの研究会「カルチュラル・スタディーズ・サークル (CSC)」がその最初である。言語文化研究科で「言語文化共同研究プロジェクト」がスタートしたのは2000年度なので、その4年前のことになる。その後、2005年度から2017年度までは「ポストコロニアル・フォーメーションズ (PCF)」と研究会の名称を変え、どちらかといえばポストコロニアル研究に焦点を絞った研究を進めてきた。

研究会の名称をこのように変えてきたのは、ひとつには、その時々メンバーの関心を反映させたためである。この数年は、とくにアメリカ文学を専門とする院生のメンバーが増えてきたようだ。しかし、1996年当時から現在にいたるまで、研究会の名称は変わっても、また「正規」「非正規」のメンバーに多少の入れ替えはあっても、文化や文学の研究に対する基本的な姿勢や視点には、ある種の連続性が保たれてきたように思われる。簡単にいえば、ひとつには、文化や文学を社会に開かれたものとみなし、その相互関係や相互作用を（必要に応じて「学際的」に）捉えようとする姿勢、そのこととも関連し、ふたつめに、それらの文化や文学が形成される歴史的なプロセスを注視しようとする姿勢である。

このような姿勢は、じつは私たちがカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究から学んできた視点にほかならない。ちなみに、最初の研究会の「カルチュラル・スタディーズ・サークル」で私たちが取り組んだレイモンド・ウィリアムズは、「広い意味での政治的また文化的なヘゲモニーは、その定義上つねに支配的であるが、現実において、それはけっして全体的でも絶対的でもない。どのような時点においても、それにとって替わ

る、あるいはそれに直接対抗する政治と文化の様態が、その社会の意味深い要素として存在するのだ」と述べている。そして、ある時代に支配的なイデオロギーや世界観などの「静的なヘゲモニー」を軸に文化を捉える視点を「時期的 (epochal)」なものと呼び、そのような「静的なヘゲモニー」の支配を揺るがすような要素を察知しつつ、文化の形成や変容のプロセスを探る「歴史的 (historical)」な分析を提唱している (Raymond Williams, *Marxism and Literature*, Oxford University Press, 113)。

文化研究や文学研究でも、当然ながら、ある「分野」が流行ったり廃れたりすることはある。流行りの分野が、あまりよくない意味で「専門化」し、その本来の意図あるいはプロジェクトの意義が薄められてしまうことも少なくはない。とはいえ、そのような流行り廃れの話に乗って、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究は古くなった、などと言いつつのもあまり生産的なことではないだろう。21 世紀の現在、私たちの研究会でも、グローバリゼーションと文化の関係といった問題関心が高まっているが、たとえばそのテーマを追究するにあたって、先に述べたような基本的な視点をさらに広げたり深めたり精緻化したりすることが求められるにちがいない。そのような努力をつづけていくことが、私たちの新しい研究会 Cultural Formation Studies (CFS) の意図であり、プロジェクトであることには変わりがない。

2. 2018 年度の CFS の活動

CFS の研究会は、原則として毎月の最終土曜日に開いている。たいていは文化や文学にかかわる英語文献を取り上げ、それぞれの担当者がその内容を紹介し検討した後、全体討論に入る。このようにして、先行研究の趣旨や意義、欠点や盲点などを議論していく。それはまた、私たち自身の批評意識や批評の言葉を鍛えていくプロセスでもある。

2018 年度の前半は、2017 年度に引き続き、Rosi Braidotti と Paul Gilroy の編集による *Conflicting Humanities* (Bloomsbury, 2016) を検討した。年度後半は、エドワード・W・サイードの最後の著作で死後出版の *Humanism and Democratic Criticism* (Palgrave Macmillan, 2004) を取り上げた。両者ともに、人文学とはなにか、その研究や批評はどうあるべきかという関心を根底に置いた著作といえる。

以下、その研究会の記録を残しておきたい。開催日、章とタイトル、担当者の順に示す。研究科の修了生で大学の専任の職についているものには、現職の大学名も付記しておく。

1. 2018 年 4 月 28 日 (Rosi Braidotti and Paul Gilroy eds., *Conflicting Humanities*, Bloomsbury, 2016)
 - ・ Chapter 4 “Humanities and Emancipation: Said’s Politics of Critique between Interpretation and Interference,” pp.75-94. 村上八重子
 - ・ Chapter 6 “The Political Enlightenment: A View from the South,” pp.109-127. 小倉永慈
2. 2018 年 5 月 26 日 (*Conflicting Humanities*)

- ・ Chapter 7 “‘We Belong to Palestine Still’: Edward Said and the Challenge of Representation,” pp.129-142. 加瀬佳代子（金城学院大学）
- ・ Chapter 8 “Where Am I Supposed to Go Now?” pp.143-163. 久保和真
- 3. 2018 年 6 月 30 日（*Conflicting Humanities*）
 - ・ Chapter 9 “The Missing Homeland of Edward Said,” pp.165 -183. 松本承子
 - ・ Chapter10 “Versions of Binationalism in Said and Buber,” pp.185-210. 古東佐知子（岐阜市立女子短期大学）
- 4. 2018 年 7 月 28 日（*Conflicting Humanities*）
 - ・ Chapter 11 “Further Reflections on Exile: War and Translation,” pp. 211-227. 木村茂雄
 - ・ Chapter 12 “We, the Non-Europeans,” pp. 229-244. 小杉世
- 5. 2018 年 9 月 17 日（*Conflicting Humanities*）
 - ・ Chapter 13 “Musical Dis-Possessions,” pp. 245-265. 桑原拓也
 - ・ Chapter 14 “In the Time of Not Yet: On the Imaginary of Edward Said,” pp. 267-276. 村上八重子
- 6. 2018 年 11 月 23 日（Edward W. Said, *Humanism and Democratic Criticism*, Palgrave Macmillan, 2004）
 - ・ Chapter 1 “Humanism’s Sphere,” pp.1-29.
pp. 1-14. 稲垣健志（金沢美術工芸大学）； pp. 15-29. 松本ユキ（近畿大学）
- 7. 2018 年 12 月 27 日（*Humanism and Democratic Criticism*）
 - ・ Chapter 2 “The Changing Bases of Humanistic Study and Practice,” pp.31-56.
pp. 31-43. 松本承子； pp. 43-56. 小倉永慈
- 8. 2019 年 1 月 26 日（*Humanism and Democratic Criticism*）
 - ・ Chapter 3 “The Return to Philology,” pp.57-83
pp. 57-70. 久保和真； pp. 70-83. 加瀬佳代子（金城学院大学）
- 9. 2019 年 2 月 23 日（*Humanism and Democratic Criticism*）
 - ・ Chapter 4 “Introduction to Erich Auerbach’s Mimesis,” pp.85-117.
pp. 85-101. 舞さつき； pp. 101-117. 木村茂雄

平成 2019 年度も 4 月から活動を開始し、サイドの *Humanism and Democratic Criticism* の検討はすでに終えた。次は 2018 年度前半に取り上げた *Conflicting Humanities* の編者の一人である Rosi Braidotti の「ポストヒューマン」と人文学についての議論を取り上げ、その後は、ガヤトリ・スピヴァクの *Readings* (2014) の検討に入っていく予定である。これらの題材に関心のある方々の自由な参加も、もちろん歓迎する。

木村 茂雄